

江東区 ゆかりの人

いし だ は きょう  
石田波郷



## 砂町に暮らした石田波郷

### 石田波郷 略歴

石田波郷は大正2年(1913)に愛媛県で生まれました。昭和21年から33年(1946~1958)まで約12年間江東区砂町に住み、砂町を第二の故郷と呼んでいました。中学時代、同級生の後の大友柳太朗の勧めで俳句を始め、高濱虚子の『ホトギス』で4Sと言われた俳人の一人である水原秋櫻子に師事しました。水原秋櫻子が『ホトギス』から独立し起こした『馬酔木』の編集にも関わりました。

加藤楸邨、中村草田男と共に、人間探求派と呼ばれ、『鶴』や『現代俳句』を創刊するなど、戦後の俳壇を先導しました。高濱虚子の没後は朝日新聞選者となり、俳句だけで生計を立てた数少ない俳人の一人でした。昭和44年(1969)、56歳で亡くなりました。

### 石田波郷の代表的な句

バスを待ち大路の春をうたがはず

初蝶やわが三十の袖袂

霜柱俳句は切字響きけり

七夕竹借名の文字隠れなし

ひとつ咲く酒中花はわが恋椿

### 石田波郷が江東区を詠んだ句

百方の焼けて年逝く小名木川

江東唯焦土

はこべらや焦土のいろの雀ども

一樹無き小学校に吾子を入れぬ

ひとり寒し砂町銀座過ぎるとて

霜の墓抱き起されしとき見たり